

2020（令和2）年度 福岡女子大学 外国人留学生入試

〔 A 日程試験問題 〕

国際教養学科

小論文

【 60 分 】

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は4ページから6ページにあります。問題は全部で**3問**です。
- 3 解答用紙には裏にも解答欄があります。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 5 試験開始と同時に解答用紙の**受験番号欄に受験番号**を記入してください。
- 6 試験終了後、**問題冊子は持ち帰ってください**。





## 問題 次の文を読んで、後の問に答えなさい。

「大きな余震がきたらどうしよう」と強く不安を感じていると、自分だけで抱え込むより、誰かに話したいと感じる。そんなときに知り合いを見かけ、話しかける。知り合いと話すことで、自分の不安な気持ちを受け止めてもらうことができ、相手も同じように不安を感じていることがわかる。それだけで少し気持ちが楽になるのだ。しかし、これがうわさのきっかけになることがある。うわさを通じて気持ちを共有することも、人との“つながり”＝関係を強めるのである。

だからこそ、うわさを伝えてくれる相手には、その内容が事実と反するのではないかと思っても、なかなか言い出しにくいのである。せっかく「私」に伝えてくれたのに、正面切って否定すれば、相手の好意を無にすることになるからだ。相手が「事実」だと確信しているようなら、相手が情報の真偽を見抜けなかったと指摘することにもなる。もっとも「ウソではないか」と疑問に思っても、自分自身その確証が持てない場合も多いだろう。だとすると、あえて疑問を出すことはしない。もちろんそれでも、事実関係が重要な話であれば、疑問を呈するかもしれないが、その場合でもやわらかく、相手との関係に配慮し、相手の<sup>メンツ</sup>面子をつぶさないようにするはずである。

また、「友だちの友だちが体験した」という話の場合、典型的な都市伝説であるとわかっても、普通あえて指摘はしない。都市伝説はネタとして楽しむために語られるからである。あえて指摘する人は、昔なら野暮、いまなら空気が読めない、と言われてしまう。

事実かどうか疑わしい話が広まるのは、うわさが既存の人間関係を基盤にしているためでもある。やはり、うわさは事実性からのみ理解、評価することはできないのだ。

誰かと顔を合わせると、何らかの話題が必要である。久しぶりに会う相手なら、お互いの近況を話すだけでもある程度時間が経つことだろう。しかし、そのうち話すネタがなくなってしまい、お互いの状況が違くと話が盛り上がることもない。そうなると、昔話である。同窓会が典型的なように、「いま、どうしてる？」から始まった話が、いつの間にか昔の話へと移り、大いに盛り上がる。なぜなら、昔話は「共通の話題」であるからだ。

そう親しくない相手ならどうであろうか。自分のことをいろいろ話したくはないし、相手のことを聞き出すのも「詮索好き」だと思われる。しかし、一緒に過ごす時間を埋める必要がある。どうすればいいのだろうか。

ケータイやスマートフォンが普及し、電車内で読書する人が減っている。以前なら、通

勤・通学時には新聞や雑誌を、長距離移動のときは小説を手にする人が多かったのだが、ケータイ普及以降は手のなかの画面を見つめることがこれに代わったのだ。車内での読書の減少は、「読書離れ」「活字離れ」の象徴として語られたり、仲間志向・内輪志向の象徴として批判されたりする。仲間志向・内輪志向の象徴だとみなされるのは、車内という同じ空間にいる人を無視し、自分だけの世界に閉じこもろうとすることや遠くの知り合いとつながろうとすることをケータイが手助けするからであろう。一九七九年に登場したウォークマン以降顕著となる私生活主義の象徴として「車内のケータイ」は批判されるのである。

しかし、そもそもどうして列車内で読書するのか。ドイツの歴史学者ヴォルフガング・シヴェルブッシュによれば、車内で読書するという「習慣」は鉄道の誕生後すぐに生まれたものだという（『鉄道旅行の歴史』）。

馬車で移動した時代には、たまたま乗り合わせた人と数時間、時には数日一緒に過ごすことがわかっていることもあって、みな談笑に励み、親しくなるものであった。しかし、鉄道により旅がスピードアップすると、話を始めたとしても相手はすぐに降りていき、違う人が乗ってくる。旅人は早く目的地につくことばかり考え、イライラするようになる。お互い話すこともなく、数分ないし数時間、鼻をつき合わせて見つめあうような状況は、鉄道によって初めて生み出されたのだという。

このような状況をやり過ごすための小道具としてキオスクで売られるようになったのが書籍である。ゆえに、車内での読書とは、目の前の人との関係を避けるために生まれた「習慣」なのである。その小道具が書籍からウォークマンやケータイ、スマートフォンに代わただけであり、「活字離れ」の象徴などと考える必要はないのだ。対面の人間関係からの撤退というなら、それは一九世紀に始まっていると言えるだろう。

話を戻そう。話題に困ったときや場つなぎ、時間つぶしの話題として、共通の知り合いのゴシップ（人に関するうわさ）に花が咲くことは多い。お互いに知っている人の話なら、面白く、話も続くものである。あるいは、初対面の相手と話しているうちに、共通の知り合いがいることがわかって、「世間は狭いですね」などと盛り上がることもある。「共通の知り合い」は場つなぎになるだけでなく、初対面の相手との距離を縮めてくれるのだ。

（松田美佐『うわさとは何か』中央公論新社、2014年より）

**注** 都市伝説……世間で人々の間にひろまっているうわさ話を指す。起源や根拠が不確かであることが多い。

ウォークマン…ソニーが発売して広く普及した携帯型音楽プレーヤー類を指す。

キオスク……鉄道駅構内にある小型の売店のことを指す。

**問1** 下線部「うわさを伝えてくれる相手には、その内容が事実と反するのではないかと思っ  
ても、なかなか言い出しにくい」に関して、筆者は、相手の話している内容が事実と反する  
疑いがある場合であっても、簡単に否定できないようになるのはなぜだと考えているか、  
わかりやすく説明しなさい。本文をそのまま引用はしないで、自分で考えて答えなさい。

**問2** 下線部「車内で読書するという「習慣」は鉄道の誕生後すぐに生まれた」に関して、次の  
(1)・(2) それぞれに関する筆者の考えをわかりやすく説明しなさい。本文をそのまま引用はしないで、自分で考えて答えなさい。

(1) 筆者は、鉄道の時代になって車内で読書する習慣が人々の間ですぐに生まれた理由について、どのように考えているか、説明しなさい。

(2) 筆者は、鉄道車内での「読書」が車内での「ケータイ、スマートフォン」へと代わったことについてどのように考えているか、説明しなさい。

**問3** 下線部「「活字離れ」の象徴などと考える必要はない」と筆者が述べていることに関して、  
次の2点について必ず言及しながら、現代社会に対するあなたの考えを論述しなさい。

- ・「車内のケータイ」が批判されることを、あなたはどうか考えるか。
- ・現代社会における「活字離れ」の原因を、あなたはどのようなものと考えているか。



